

子供の死体のある風景——サタン文化とは何か？

Greatchain

2018/03/30

時間がたつにつれて——時が熟してくるにつれて——これまで曖昧だったことが、いよいよはっきりしてくる。点と点がつながって全体像が見えてくる。

アメリカのデンバー国際空港にある、有名な壁画や彫刻を、もしご存じでない方があれば、検索してみてください。全体が異常で不気味で、普通の人は反発し、気持ちの良い人はいないはずである。これらが一般客の通る通路に、壁画や彫像として展示されている。（密かに隠されているのではない。）これこそ、**サタン文化**と呼ぶべき、典型的なものではないだろうか。文化という以上、それは展示物だけでなく、我々の生きる空気の中に漂っているものでなければならない。それが「彼ら支配者」の狙いでもある。我々を知らないうちに、徐々に、完全に我々の正体を奪うこと、神の創造の意図とは正反対のものに、変えてしまうことに違いない。私が、初めてこの壁画や彫刻の存在を知り、一般の人々にも知らせたのは、だいぶ前のことである。そのときには、まだその意味が完全にはわかっていなかった。

「子供の死体のある風景」というのは、実際の題でなく、私が呼んでいるのだが、そう言えばわかるであろう。子供が何人か棺桶に入っている。「彼ら支配者」の意図は、こういう状態で、これが常態化（normalize）される、つまり美意識に取り込まれることである。現にそうなりつつある。また、半月刀を振り下ろしているナチス将校の絵がある。これも、その通りのことが起こっている。ナチスと「彼ら」は同根だという説明を、私はここで何度もした。ここでも明らかに見られるのは、こういうことが起こらねばならない、というメッセージである。また、柵のようなところに、スーツケースの上にくるまると悪魔の彫像が置かれている。これはどう見てもスーツケース爆弾である。

さらには、空港の玄関口には、（夜は目の光る）青い馬の像がある。これは、災難を意味する黙示録の4頭の馬の「(死の) 青白い馬」だと言われる。実際に、これを彫った彫刻家はその下敷きになって死んだらしい。また古代エジプトの死神の「アヌビス」の像もある。これらすべてに、人々を呪う、しかし呪いに慣れさせようとする意図が、込められているのは明らかだろう。これは彼らが、神に向って、「どうです、こうなりますよ」と挑戦しているのだと考えられる。これは最近になって意味がつながってきた。その通り、**ペドフィリア文**

化である。これも、彼らが神に向って、純真無垢の子供を強姦しながら、「どうです、あなたの創った最も大切な子供が、このザマですよ」と、言っているものと解釈できる。

これは、さらにつながっている。つまり、ペドフィリアは単なる許せぬ犯罪ではない。彼らは狙っているのは、これを「ノーマライズ」することである。10歳の子供、更には7歳の子供をセックスの相手にすることは、異常ではないのだ、人間の正常の行為なのだ、という新しい文化を、人間社会に植え付けることである。(Normalizeは「常態化」であって、「正常化」と訳すと意味が逆になる。注目すべきは、プーチン大統領が、西側文化の墮落を論ずるときにも、彼らはペドフィリアや異常性関係を「ノーマライズ」すると、これを突いている。このプーチンを、わが国のメディアは馬鹿扱いしている。)

もう一つ、デンバー国際空港の壁画について、言いたいことがある。この一部に、おそらく「彼ら」の暴力革命が起こって「新秩序」が生まれた後の、何種類かの**花**が出てくる。この花をよく見ていただきたい。これは(神の創った、人間を癒す)自然の花ではない。明らかに神を否定し、神の向こうを張った、無機質の**造花**である。これは非常に大きな意味をもつ。世界がこうなったとき、我々も人造人間になるはずである。

これは、ダーウィン進化論と大きな関係がある。インテリジェント・デザインを否定し、あくまで、機械的な自然淘汰による進化だけで自然界ができたと主張する、リチャード・ドーキンは、『神は妄想である』でこう言っている——「自然淘汰による進化は、ついには途方もない複雑さと、優雅さにまで昇りつめる、設計(デザイン)と見まがう、〈まがいもの〉をつくり出す。」これは要するに、自然には、意志も設計も目的もないのだから、自然にできたものはすべて、神の作品の「まがいもの」なのだが、その「まがいもの」が、おそろしく複雑な優雅なものになることがある」という意味である。私はここを評して、こう言ったことがある——「デザインと見まがう見事なまがいもの」とは、高度な技術で作られた**造花**みたいなものであろう。それはいかに見事でも死んでいる。

ドーキンスという代表的ダーウィニストによれば、この世界は見事な「まがいもの」でできている。我々自身も見事なニセモノということになる。——どうして彼は、ここまで無理をして、こんなことを言わねばならないのだろうか？ これはちょうど、真逆のウソによって、無理な理屈を押し通し、世界を支配しようとするサタンとその手下のやり方に、ぴったり寄り添うものではないか。どちらにしてもウソは必ず顕われる。虚の世界は生き残れない。